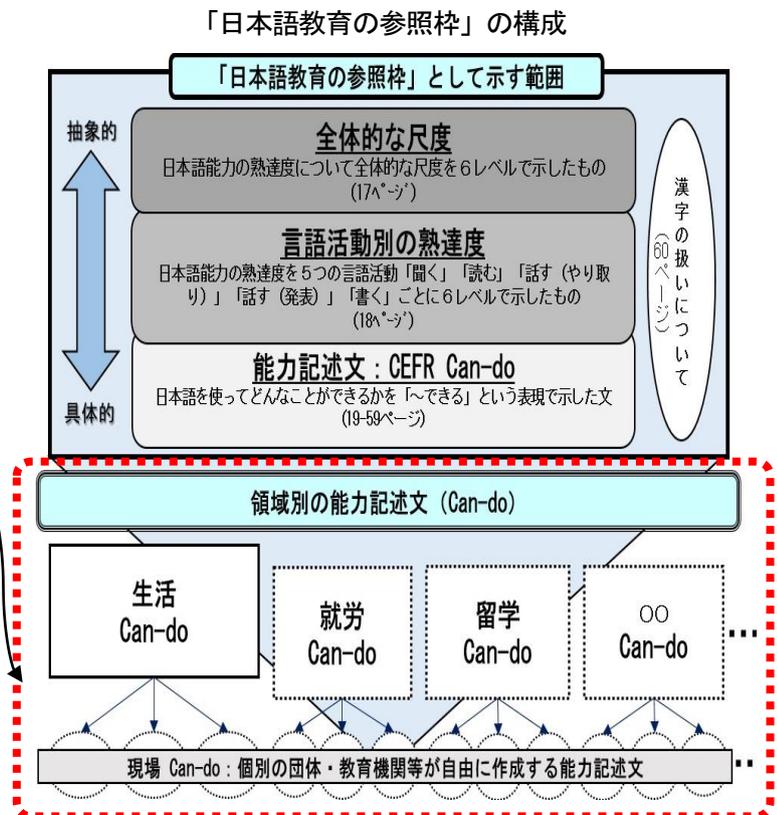


能力記述文の作成方法及び検証手法に関するガイドライン（案）

構成（目次）

1. ガイドラインの目的
 - (1) 目的
 - (2) 能力記述文とは
2. CEFRの尺度に基づいた能力記述文の作成方法
 - (1) 使い方
 - (2) 作成の原則
 - (3) 作成方法
 - (4) 作成事例
3. 能力記述文の検証手法
 - (1) 検証方法の種類
 - (2) 収集するデータの数等
 - (3) 参考文献



1. ガイドラインの目的

(1) 目的

- 令和元年度に「日本語教育の参照枠」一次報告（案）が示された。今後、様々な教育機関や企業等で、生活、就労、留学等の領域別の能力記述文が作成されることが予想される。これら領域別の能力記述文が CEFR の例示的能力記述文の尺度の質的水準をひとつの目標基準として、教育機関や企業等が参照できる能力記述文の作成方法および検証手法を示すことを目的として本ガイドラインを作成する。

(2) 能力記述文（descriptors）とは

- 能力記述文とは、社会的存在である言語の使用者及び学習者が、日常生活、就労、就学等の場面で直面する課題を達成するために必要な言語能力の水準を、言語を学ぶ上での目標として具体的に示したものであり、言語を使ってできることについて、「～できる」という形で示された文である。また、個別の能力記述文を Can do（Can do statements の略）と呼ぶこともある。
- 能力記述文は、日本語学習者、日本語教師、学習者の家族や職場の人など日本語によるコミュニケーションを円滑に行うための参考として、日本語教育に関わる全ての人活用できるものである。能力記述文が果たす機能は以下の通りである。

- ① 学習者自らが自分自身の該当する能力レベルと目標言語を使って何ができるか具体的な中身についても把握できるチェックリストとしての機能。
- ② 診断的試験の開発とともに、言語活動を基本にしたカリキュラム、教材の開発にかかわる基盤としての機能。
- ③ 外国語の訓練および企業の人材採用にかかわる人々にとって役立つ、活動ベースの言語学的調査を実施する手段としての機能。
- ④ 異なる外国語間での能力の枠組みを比較検討したり、同じ状況下に存在する、教育や教材の目的、内容を比較したりする手段としての機能。
- ⑤ 外国語学習者への指導や試験にかかわる者に対して、実用的な情報や資料を提供する機能。
- ⑥ 試験結果を活用しようとする者が、あるレベルでの試験の認定証の意味をよりわかりやすく解釈できる機能。
- ⑦ 日本語学習者が異なる教育機関で継続して学習した場合、学習の接続を有機的なものにし、効率のよい継続学習が実現できる機能。
- ⑧ 研修や人事管理にかかわる人にとって、職務内容にかかわる職能を策定する際に、また、新しい職務について外国語能力の必要条件を特定する際の参考情報として活用できる機能。

2. CEF Rの尺度に基づいた能力記述文の作成方法

(1) 作成の原則

○ CEF R (2001) では、能力記述文を開発する際の原則として以下の項目を挙げている。

- ・肯定的表現 (positiveness) : 熟達度レベルを設定する目的が学習者を振り分けるためにあるのではなく、次の学習目標を認識するためにあるのだとしたら、「肯定的記述」のほうが望ましい。
- ・一義性 (definiteness) : 言語課題を具体的に記述し、あるいはその課題の遂行に必要な技能を具体的に記述しなければならない。
- ・明確さ (clarity) : わかりやすく、はっきりとした表現でなければならない。専門用語はできるだけ用いないことが望ましい。
- ・簡潔さ (brevity) : 教師向けには短い能力記述が望ましい。
- ・独立性 (independence) : 短く具体的な記述は、単独で教師用チェックリストに取り入れ、恒常的に判定に用いることができる。

(2) 作成方法

[既にある能力記述文をもとに作成する場合]

- ① コースの言語行動別の行動目標をイメージする
- ② CEF R Can do など参考になりそうな Can do を探す
複数の Can do から選択抽出してもよい
- ③ 選んだ Can do が自分の教育現場及び学習者のニーズに合うかどうか考える
- ④ 自分の教育現場及び学習者のニーズに合うように場面や話題などを書き換える

[コースの学習目標やそこで示されている言語活動、使用領域をもとに作成する場合]

- ① そのコースで定められている学習目標を選ぶ
- ② その学習目標で必要となる言語活動(場面, 行動)を確認する
- ③ 適切なカテゴリー, レベルを設定する
- ④ カテゴリー, レベルに合わせて学習目標を書き換える

(3) 作成事例

[標準的なカリキュラム案 Can do]

- ① 「「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」の能力記述 293 項目をもとに, それぞれの能力記述に目標となる言語活動についての「条件」, 「話題・場面」, 「対象」, 「行動」の表現を加え Can do としての文章を整えた。
- ② CEFR のレベルとカテゴリーへの関連付けを行った。
- ③ Can do 作成担当者相互で, 作成した Can do を検証し, 似ているものについては統合, 多くの言語活動が含まれている場合は分割, あるいはレベル変更などの修正を行った。
- ④ Can do 作成担当者以外の専門家による検討を行い, 表現の修正やレベルの変更を行った。

[JF Can do]

- ① CEFR 例示的能力記述文を四つの要素(条件, 話題・場面, 対象, 行動)に分析
- ② CEFR 例示的能力記述文の言語的な特徴を分析し, レベルごとの特徴を抽出
- ③ 国際交流基金の拠点における教師研修コースの目標記述を①, ②の分析結果をもとに能力記述文(JF Can do)を作成
- ④ 作成した能力記述文(JF Can do)にトピックを付与

3. 検証手法

(1) 検証手法の種類

- CEFR (2001) では, 以下の手法を組み合わせて検証を行うことを勧めている。

CEFR (2001) で示されている尺度開発の方法論

I 直感的手法: 経験則による検証	<ol style="list-style-type: none">① 専門家(エキスパート) 尺度の記述を専門家に依頼する② 委員会 少数からなるチームが相談役の助言の下で開発を行う③ 経験主義 一研究機関内でかなりの時間をかけ, 特定条件の下で評価が行われる。組織的な試験試行とフィードバックが行われ, 表現の精緻化が行われる。熟達度の等級尺度を開発する伝統的な方法
--------------------------	---

<p>II 質的調査法: 小規模ワークショップ による検証</p>	<p>④ 基本概念:定式表現(スケール設計上の重要概念の形成) その尺度を使う典型的なインフォーマントに対して、尺度の 草稿を並べ替えさせる活動を行ってもらい、尺度の並べ替 えについての判断基準についての検討を行う。</p> <p>⑤ 基本概念:言語行動(重要概念とパフォーマンスの照合) 能力記述と典型的な言語行動とがレベル帯の中で対置さ れ、記述されている内容と実際に行われたことの間的一致 を確認する。</p> <p>⑥ 基本特性(主要特性) 言語行動が(通常書き留められて)インフォーマント によってランク付けされ、共通の等級の順序について 話し合う。実際に記録を分類した時の原則が確認さ れ、レベルごとに記述される。</p> <p>⑦ 二元決定法(Yes/Noによるレベル決定過程の作成) 代表的な標本例をレベルの標識柱(pile)に振り分けていく やり方。それからレベルの境界に議論を集中して鍵となる 特質を確定してゆく。</p> <p>⑧ 比較判定法(ペア比較による判断) グループで一对の言語行動をどちらが良いか、また、それ はどうしてかを議論し、審査員が使用するメタ言語のカテ ゴリーを特定していき、個々のレベルでの顕著な働きをする 特徴を特定していく。</p> <p>⑨ 仕分け作業(並べ替えタスク) 特徴記述文ができていれば、インフォーマントに依頼してそ れらを然るべきカテゴリー別の標識柱に振り分け、あるいは レベルに仕分けする。</p>
<p>III 量的調査法: 統計的手法を 用いた検証</p>	<p>⑩ 弁別分析(判別分析) チームで予備評価しておいた一連の言語運用の標本 に、詳細な談話分析を行う。この質的分析によって、 異質の質的特徴の発生率を認定し、計算に取り込み、 重回帰分析にかけて、認定された特徴のうち、試験員 が評価を与えるのに最も重要だと思われるものを決定 する。</p> <p>⑪ 多元尺度(多次元尺度法) 鍵となる特徴を、それら相互の関係を認定する記述技 術であり、運用は様々なカテゴリーの分析的尺度によ って査定される。分析技術によって得られる結果は、 どのカテゴリーが現実のレベル判定に当たって決定的 かを示し、様々な異なるカテゴリー間の相互の距離関 係を図示することを可能とする。</p> <p>⑫ 項目応答理論(IRT)または「潜在特性」分析 IRTは一群の測定モデルあるいは尺度構成モデルであ る。複数のモデルがあるが最も簡潔なものが Rasch モ</p>

	デルである。IRT は潜在特性（言語能力）尺度と項目に対する応答（正誤など）の関係に確率を導入して発展したもので、主としてテスト項目あるいはテストの項目プールに含まれる個々のテスト項目の特性（困難度等）を表わすのに使われる。
--	--

* 枠内の説明文は、欧州評議会（2014）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』追補版、吉島茂、大橋理枝（訳・編）朝日出版社の訳文を基に一部修正

（2）収集するデータの数等

- ・ データ数
- ・ データの収集方法（ネット/対面）
- ・ 収集すべきデータの属性やレベル分布

（3）参考文献

- ・ 領域別（就労、介護など）の Can do の作成方法を示したもの
- ・ マニュアル
- ・ 英検報告書
- ・ GTEC 報告書
- ・ 国際交流基金報告書 等

以上